

い、容貌などの外見的なことであれ、心根の優しさ、臆病、強さへの憧れなど、彼らが自己をヒジュラだと意識するきっかけはいくらでもある。彼らはヒジュラになるのではない。彼らはヒジュラとして生まれてきた、と考える。そのため、彼らはその時点で家族の元を離れ、カーストを離脱してヒジュラの社会に入ったのである。

ところが、インド社会に西洋の影響が押し寄せると、非ヒジュラのゲイのモデルが現れる。都市を中心に西洋的なゲイが生まれ、伝統的なインドの価値観と衝突しはじめる。当然のことながら、インドのゲイは、上流階級、知的労働者といった、外国人との接触機会の豊富な層の出身者が多い。西洋社会のように、同性愛が宗教、法律で禁じられた歴史的背景をもつなら、彼らもそれと鋭く対峙することで自己のアイデンティティーを模索することができたのだが、そうした対立軸はインドにはない。それどころか、インドでは彼らは最悪の蔑称であるヒジュラと呼ばれ、激しく苦悩せざるをえない。そこから、インドのゲイたちのアイデンティティーを求める運動は始まった。

このプロセスは、近代化、工業化、西洋化の波がインドに押し寄せ、インドの伝統的農村の秩序を崩壊させるプロセスと同時に進行した。それは、ヒジュラがヒジュラとしての祭祀的な役割を喪失していくプロセスでもあった。その過程でヒジュラはただの男娼、芸人、乞食の集団と見做されるようになりつつあった。こうした動きを反転させようとする試みはヒジュラたちから起こっている。ヒジュラたちはふたたび、ヒジュラとヒンドゥーの神々との結合を求めはじめた。ヒンドゥーの神々の中には、性を自由に転換できると信じられているものがある。マハーバラタの英雄伝説には、半陰陽の戦士で勇者ブリシマを倒したシカンデーが登場する。また、クリシュナが女性に姿を変えて、戦勝祈願の生け贄となった英雄アルジュンの息子、アラヴァンの一夜妻になったエピソードもある。こうしたアーリアの創世神話の英雄の祭に、近年になって多くのヒジュラたちが参加するようになった。そればかりではない。都市で暮らす非ヒジュラのゲイたちも、ここ数十年の間に、こうした祭に押し寄せるようになってきた。彼ら

は、ヒジュラを自己の対立物と見るのではなく、彼らと手をたずさえてインドの宗教、神話の系譜を引く正当な存在であることを主張しはじめたのである。

著者の説くゲイのアイデンティティーのモデルと、ここで簡単に紹介したインドのそれと、どちらが正しいかを問うつもりはない。ただ、それがゲイであれ、ゲイではない男性、あるいは女性であれ、アイデンティティーはそれぞれが模索し確立するものだ。外部からモデルを与えられるようなものではないことを述べておきたい。

(大谷幸三・ノンフィクション作家)

Anthony Reid, ed. *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asia and the Chinese*. St. Leonards: Allen & Unwin, 1996, xxx+232p.

オーストラリアアジア学会 (ASAA) の東南アジアシリーズ第 28 集にあたる本書は、タイ・中国交易史や華僑・華人史の研究に活躍しながら惜しくも早逝した故 Jennifer Cushman (1945-89) に捧げられている。それに相応しく「東南アジアと Chinese (本稿では文脈に応じ中国人、華僑、華人などと訳す) の関係史」を共通テーマに掲げるこの論文集には、歴史学や人類学、政治学、文学など様々な立場から東南アジア史や華僑・華人史研究を主導してきた大家が集い力作を寄せている。J. A. C. Mackie による序論と V. Hooker および A. Milner による追悼文を別にすれば、本書は以下の八章からなる。

- 1 章. 僑居 (Sojourning) : 東南アジアにおける中国人の経験 (Wang Gungwu)
- 2 章. 東南アジアとの長期交渉史における中国人のフローと滲潤 (Anthony Reid)
- 3 章. クレオール化した東南アジアの華人社会 (G. William Skinner)
- 4 章. Ngo Si Lien は何を意図していたか: ベトナム史における 15 世紀の画期について (Oliver Wolters)
- 5 章. 大実業家と将軍たち: 近代タイの社会形成と中国歴史小説 (Craig Reynolds)
- 6 章. 海上交易の盛衰——ある中国商人からバ

タビアへの書簡 (Leonard Blussé)

7章. 村落部東南アジアの華人定住地——書かれざる歴史 (Mary Somers Heidhues)

8章. 19世紀オランダ領東インドにおける祖廟、葬祭組織と再「中国人化」の試み (Claudine Salmon)

紙幅に限りがあるので、本稿では比較的広い地域とかなり長期の歴史を視野に収めた冒頭の三章を中心にみてゆきたい。Wang Gungwu の章は、本の表題となっている二つのキーワードのうち、僑居（一時的滞在）を意味する *sojourn* の概念を、広く人の移動の研究に適用しようと訴える提言的な論文である。彼によれば、移住（永住）を意図しない僑居は世界史上普通にみられたが、とりわけ19世紀末以降中国から東南アジアへ流入した人々について「華僑」の呼称が普及した。その背景には、彼らを政治的に取り込もうとした清朝や革命勢力の意図があった。東南アジアに国民統合をめざす国家群が成立すると、「華僑」には居住国への不忠という負のニュアンスが強まる。冷戦下中国に共産政権が成立した事情も加わり、彼らは定住を選んでも猜疑に晒されてきた。だが昨今のグローバル化の進展につれ僑居の現象が拡大しつつある、と Wang はみる。しかも交通・情報革命などにより、必ずしも居住地の社会に同化せず故国との紐帯を保持することが容易になってきた。東南アジアから米・豪州などへ再移動した「華僑」に限らず、出稼ぎ労働者や国際ビジネスマンなど各層によるしたたかな現代的僑居が広まりつつある、というのである。これは一見 B. Anderson の「遠隔地ナショナリズム」の議論を想起させるが、Wang は僑居とは本来政治的な忠誠と別次元の私的な営みだという点を強調する。むしろ、これまで「不幸にも」付せられてきた政治的含意を排すことが僑居の概念を学問的に活用する鍵だと主張している点、Anderson と対立的にさえ読める。

Skinner の章は、定住（*settle*）がもたらした一つの帰結——クレオール社会の成立と変遷を扱う点、Wang 論文と対をなす。彼によると、中国系の男性と現地女性の通婚は東南アジアに広く見られたが、その子孫が現地社会へ吸収されることなく独自の社会システムをかなり安定的に形成した

のは、フィリピンのメスティーソ、ジャワのプラナカン、マラヤ海峡植民地のババの三事例に限られた。これに対し、二世以降の子が選択により現地社会へも編入可能だったタイでは「同化」が進行した。両者を分けた背景として、土着権力が保たれたタイ（や過去のジャワ）では同化が社会的上昇につながったのに対し、植民地支配下の三カ所では下降を意味したこと、中国系と土着の社会が政策的に区別されたことなどが指摘される。これら政治的な要因と並び、各地の宗教環境の違いも時代を追って分析される。三つのクレオール社会は、日常語や衣食住、親族構造や信仰体系におよぶ混雑文化を発展させた。いずれも世代を重ねた富の蓄積を通じ、19世紀末まで新来の中国移民（新客）より社会・経済的にも優位に立っていた。20世紀に入り、勢力を増した新客との競合や中華ナショナリズムによる自己変革、現地ナショナリズムの展開、植民地政府の対応などの相違を背景に、三つの社会は帰趨を分ける。ババがマレーシアやシンガポールの「華人」社会へ編入を遂げたのに対し、メスティーソは旧インディオ上層と共に「フィリピン人」エリートを形成した。プラナカンのみが依然独特のクレオールとして、インドネシア社会の中に「居心地悪く」存続している、と概括される。本論の原型は *Proceedings of the 31st International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa: Tokyo-Kyoto, 1983* (The Toho Gakkai, 1984) に抄録として示されていたが、本書で本格的に展開されたことにより今後同種の比較論の叩き台になるとと思われる。

Reid の章は、13世紀以降20世紀にいたる中国からの人の流れと東南アジア社会への浸透のさまを俯瞰する。中国の政策による「栓の開閉」および交易の展開を軸とした長期変動と、比較的短期の地域ごとの変化の両方に目を配る彼一流の叙述法である。その要旨は、まず元寇と明朝初期の遠征が東南アジアで王朝交替や技術伝播の契機となり、海上交易を活性化させた。中国との通商の仲介役として中国系エリートがアユタヤやマジャパイトなどの王権を補佐し、中国人の集住する港市も形成された。明が海禁策に転じた15世紀半ば以降、これらの人々は東南アジアの王族層や交易民

族に同化した。それが16世紀のヨーロッパ人の記録に「中国人」が目立たない理由だ、と Reid は考える。明朝末に再び「栓が開かれ」と、マニラやバタビアなど新たな港に中国系コミュニティが成長するが、ヨーロッパ人の支配下、中国系と土着社会の区別が次第に強化されてゆく。その後も19世紀末から1930年代の植民地開発による移民ラッシュ期、中華人民共和国による「閉栓」期、近年の先進国への「北流」期——と7世紀間を通じ「不継続が常態」であったが、むしろそれが華僑・華人自身と東南アジア史の多様性を生み出した、と結論される。先の二論文と関連づけて言えば、僑居と定住のバリエーションは時々の状況次第であり、二つのあり方を相互排他的・固定的に考えない方がよいとの戒めにも取れよう。

残る五論文のうち Wolters と Reynolds は、東南アジアの中で国家や社会の形成上おそらく最も濃密に「中国」と交わってきた二国——ベトナムとタイについて、歴史叙述や文学を題材にその関係のあり方を考察する。前者は、15世紀黎朝の史家 Ngo Si Lien が中国古典の徳目を範に前代の陳朝を批判しつつ、実は同時代の国家・社会に残る「ベトナム的」脆弱さを警告していたと指摘する。後者は、ラーマ1世の欽定に始まった『三国志演義』の翻訳が、種々の翻案やドラマ化・商品化などを経て、タイの大衆文学や軍人・実業家層の戦略マニュアルとして浸透するに至った過程を分析する。このほか Blussé は、19世紀初め廈門の貿易商がバタビア総督へ送った通信文書を紹介し、アジア交

易史における重要性の割に「顔の见えない」存在だった中国人商人の実像に迫る。Somers Heidhues は、東南アジア華人の相当部分が非都市部で農林漁業や鉱業に携わり多様な住民関係を育んできた事実を強調し、西カリマンタンやバンカ・ブリトン島などを中心にその歴史を素描する。Salmon は、19世紀中葉のジャワやマカッサルで活発化した祖廟建立や葬祭組織の結成の状況を跡づけ、プラナカンの自己「中国人化」の試みが20世紀初めの中華会館運動に始まったとされる定説に一石を投じる。

以上、冒頭の主題に照らし各論文の関係づけが——本稿で筆者なりに試みたものの——必ずしも明らかでないことや、全体として島嶼部中心であることなど、不足な点は幾つか挙げられる。前者は「東南アジアと Chinese (ないし China) の関係」が幾つもの次元や領域からなり、それらについて様々な歴史が描き得る（タイトルも“Histories”とされている）こと、後者はそれらの歴史研究が国や地域のレベルでもなお未開拓の分野を多く残すことを反映したものであろう。いずれの論文も当該分野の第一人者によって新鮮な切り口が提示されており、丁寧な注と相俟って、華僑・華人研究の蓄積や今後の展望をみる上で恰好の足場になると思われる。また、東南アジア諸地域の歴史を中国との関係において考えようとする者にとっても、示唆に富む一書と言えよう。

(貞好康志・京都大学人間・環境学研究科)